

沖縄戦ショウダウン

琉球新報 1996年6月1日～6月25日連載(全13回)

目次

| | |
|----------------|----|
| 満潮とともに出撃命令 | 2 |
| 3人を3発で仕留める | 4 |
| 「子供を殺すな」と叫ぶ | 6 |
| 島の人々の予想を超え進む事態 | 8 |
| 始まった集団自決 | 10 |
| 夜間、住民が突撃 | 12 |
| アーニー・パイル撃たれる | 14 |
| 沖縄本島へ上陸 | 16 |
| 日本兵が斬り込み攻撃 | 18 |
| ドイツ降伏後、最後の決戦 | 20 |
| 続出する戦闘疲労症 | 22 |
| 与那原―那覇戦線で苦戦 | 24 |
| 戦友はほとんど戦死 | 26 |

沖縄戦シヨウダウン

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

上原 正稔

1

はじめに「シヨウダウン Showdown」とはポーカーで賭博(とぼく)師が有り金すべて賭(か)けて、最後の決勝に出、その手札をさらけ出す様を言う。ここからシヨウダウンすなわち決戦という用語が生まれた。「人間が試される究極の舞台」である戦場で一人の人間がそのすべてを賭け、戦争と人間の想像を白日の下にさらけ出し、最後に「この世で最も大切なもの」と出合うまでの物語を「沖縄戦シヨウダウン」と題して発表することにした。筆者はこの物語と出合った時の衝撃と感動を忘れない。沖縄戦を知っていたつもりで筆者の妄想を完全に、打ち砕いてしまったのだ。これほど「戦争と人間」をヘッドボイルドに、如実に、そして見事に描写した物語は他にない、と断言してよいだらう。語り手のグレン・シアレスさんは米第七七歩兵師団の一兵士として沖縄戦に参加し、慶留間、渡嘉敷の「集団自決」を目の前で目撃した。アメリカ兵が「集団自決」の始めから終わりまで詳しく語った記録はこれが初めてである。そして、これは「集団自決」の隠されていた秘密を解き明かす重要な力ギとなった。

第一章―やめろ、やめろ、子供を殺すな
一九四五年三月九日、おれたちの船団はフィリピンを離れ、北東に向かった。おれは二十五歳の年くつた二等兵だった。それ

はおれの志願が遅かったからで、理由はない。おれは今、第七七歩兵師団の三〇六連隊第一大隊A中隊の恐れを知らぬ新参兵として、

満潮とともに出撃命令

2等兵、慶留間に上陸

オキナワという島に向かっていているのだ。およそ十二隻のLST(戦

乗り移れ!」。全員どおと段はしごを駆け下り、それぞれの水

車(陸用舟艇)と数隻の駆逐艦とその護衛艦から成る小ぢやな艦隊だった。敵に覚(さと)と)られないように艦隊はジグザグのコースを取り、三月二十六日夜明け前、慶留間諸島の沖合に着いた。

そこでは既に凄(すさ)まじい艦砲射撃が始まり、航空機からロケット砲弾が島々に落ちていた最中だった。わが第三〇六連隊は慶留間島に上陸し、占領する予定だった。午前四時、全員起床し、豪勢な朝食をとった。日が昇ると船内のスピーカーががなり立てた。「全員、上陸用舟艇に

陸両用車に乗り移った。すし詰めの車内で上陸の合図を待つのは実につらい。戦う方がまだましだ。一時間ばかり待たされ、ようやく、でっかい二枚貝のような鉄のふたがどかっと開き、上陸用はしげが下ろされた。もう1度スピーカーががなり立てた。「全員、武器を装てんせよ!」。全員が一斉に装てんを始めたらからたまらない。キンキン、ガチャガチャ、金属音がけたたましい直ちに、ディーゼルエンジンが始動し、閉まった車の中では、地獄の門の扉がきしむ音のように響く。送風機

から風が送られるが、息苦しさは消えやしな。やがて、水陸両用車はガラガラ動き出し、LST艇の鉄のはしげを下り、水しぶきを上げて海中

に突っ込み、浮き上がると、わがA中隊の旗を高く掲げた水先案内の水陸両用車を追う。二十隻もの水陸両用車は約五百呎の半円形を描き、出撃の合図を待つ。子供のころ、よくみた戦争映画に出てくる、でかい、真っ白な水上発着機に、こがれていたが、今、そいつが慶留間島上空を悠々旋回しながら、艦砲射撃の方向を指示している。

潮が満ち、ついに出撃命令が出ると、水陸両用車の列は横一線に並び、海岸線に向かう。そのすぐ後ろから小型LST艇がおれたちの頭越しに慶留間島の海岸線と村落に向けロケットを発射、おれたちを援護した。海岸から五百呎ほどの距離まで来ると、そのLSTはくるりと反転し、戻ってゆく。上陸第二波陣に道を開けるためだ。今や、おれたちは自分で自分の身を守らなきやならない。

案の定、日本兵のやつらが穴の中から出てきて、軽機関銃をぶっ放し始めた。思い出したように機関銃弾が一、二発、水陸両用車の鉄板にぶつかり、はじけてゆく。おれたちは五〇口径の重機関銃をむちやくちやにぶっ放した。敵の機関銃をおとなしくさせるためだ。この上陸作戦は岩礁を避けるため、満潮時を選んで行われたから、水陸両用車が陸に揚がると、目の前に石垣の堤防が立ちふさがっていた。

それにしても見事な石細工だ。石垣は所々、砲弾で爆破され、崩れ落ちていた。おれたちは逃げる日本兵を追って、崩れ落ちた堤防の間を通り抜けて、左手の村落に出た。日本軍は村落から退却していた。やつらを山に追い詰める、という命令が下った。住民がよく利用する山道を見つけると、おれたちは登って行った。頂上には達するまで何の抵抗もなかった。頂上に着くと、背後から攻撃を受けたが、大したものじゃなかった。

この頂上から続く尾根の向こうで猛烈な銃撃戦が行われていた。「救援を頼む」との無線連絡が入ってきた。現場に向かう途中、五、六人の日本兵がおれたちの方に逃げてきたところを、やつらが気づく前に撃ち殺した。一時間ほど何事も起こらなかった。山腹に洞くつを見つけた。そこには島の住民が何人かいた。おれたちが強かんして、虐殺すると信じたに違いない。やつらは自分の子供たちをナイフと刀で殺し始め、そして自殺し始めた。

みすぼらしい着物を着た老人(男)がはだしでおれたちの方に向かって走ってきた。手には鉄の鍬(もり)を付けた竹やりを握っている。

(ドキュメンタリー作家)

沖縄戦シヨウダウシ

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

訳注・上原 正稔

2

日本軍が老人に槍（やり）を支給したに違いはない。老人は何か叫びながら、突進してきた。自動小銃が火を吹き、その老人は倒れた。その時、ようやく日系アメリカ兵が現場に到着し、日本語で壕の中の住民に「やめろ、やめろ」と説得した。ようやく惨劇が終わった。今でもおれのまぶたの裏に焼き付いて離れないのは、あの若い母親の顔だ。自分の腕の中で死んでいる子供を見つめる母親の目。何てことだ。

殺すことなんてなかったんだ。民政班から、鉄条網で囲われた収容所を用意したので住民を村に連れ戻せ、との命令が下った。おれは九十歳ぐらいのとても小柄な老女の襟（えり）首を掴（つか）かんで、山道を下りた。その老女はひざまで届くジャケット（ちゃんちゃんこ）を着、黒いだぶだぶのスボン（もんぺ）をはいていた。途中、おれたちは日本兵の死体のそばを通った。こいつは米袋を担いでいる際に撃ち殺されたらしい。銃弾で袋

が切り裂かれ、米粒が道路に散乱していた。老女は俺の手を振りはらって、泣き喚（わめ）きながら米粒をかき集め始めた。死体なんて全く眼中にない。

山に入り、日本兵を捜すことになった。山から見下ろすと、海岸線に野戦砲設置され、ちようど二軒離れた島に砲弾を撃ち込んでいる。あの島が、明日、おれたちが上陸する渡嘉敷島だ。

その夜、おれたちはLST艇に戻り、そこでシャワーを浴びると、通路に並び、食堂に向かった。何と、そこで

中隊の出番だ。A中隊は渡嘉敷島の最南端の海岸線に音も立てず上陸した。辺りはまだ暗い。俺たちの役目は、午前八時の上陸前艦砲射撃までに阿波連村落の裏側の尾根を占拠することだった。つまり、艦砲射撃を避けて逃げてくる日本軍を待ち伏せしようという狙いだ。そううまくいくはずはないと思ったが、実際

山道があった。俺たちは一列になって北上し、太陽が姿を見せる前に、尾根の先端に近づいた。目標の阿波連から二軒足らずの距離だ。ここまで日本兵の姿は見えない。やつらはおれたちの上陸に備えて抵抗するため、全員、海岸線に集結しているに違いない。尾根の山道に沿って樹木が生い繁り、視界が遮（さえぎ）られ、見えるのは、次の曲がり角までの山道だけだ。尾根は狭く、両端は深く落ち込んでいる。目標地点に近くにつれ、おれたちはいよいよ用心深く進んだ。

3人を3発で仕留める

隊の先頭を切って前進

村に着くと民政班は収容所に配給食糧のケースと飲み水の缶を積み上げ、住民のためのテント設営の最中だった。日本軍に虐待されたフィリピン住民は何と云うだろう。まさに雲泥の差の待遇だ。おれたちはもう一度

は、神に仕える従軍牧師様が酒びんを手に、通り過ぎるおれたちの水筒のカップにウイスキーを一杯ずつ注いでいる。ゴクツと飲んだアルコールがすきつ腹に染み込んだ。三月二十七日、夜明け前、またおれたちA

手、の兵士としてのおれの名声はなかなかのものだった。「シアレス、お前が先頭に立て。レッツ・ゴー」というわけで、おれは隊の先頭に立って山を登っていった。尾根は険しく、そこに数百年、人が踏みしめ、できあがった

おれはライフルを構え、撃鉄に指を触れる。いつでも来い。二番手の兵士は自動小銃を手に、五軒後ろをついてくる。おれが撃たれたら、やつが敵をやっつけるという算段だ。一番手、のおれはおとりでわけた。一軒ほど下り、おれが角を曲がったその時、妙な

物音がした。いや、嫌な気配を感じた。三十呎ほど真つすぐに小道が延び、見るとその先に機関銃が置かれ、その後ろに三人の日本兵がいた。人生で、何度も幸運の女神に助けてもらったが、この瞬間が最もついていたと言えらるだろう。おれの方を向いている機関銃の両わきに日本兵二人が横になり、機関銃射撃手のもう一人は、その三呎ほど後ろで、ズボンを下ろし尻を出し、糞(ふん)をしている。三人は同時におれを見た。スローモーション映画のようにおれはその場面を覚えていた。おれは既に小銃を肩に当てていたから、ま

ず機関銃射撃手を一発で仕留めた。やつはふわりと後ろにひっくり返った。残りの二人は機関銃の台座にジャンプした。俺は順々に二人を仕留めた。三人を三発で仕留めた勘定だ。後でおれの背後にいた仲間から聞いた話では、三発の銃声はまるで自動小銃の連続音のように響いたということだ。

俺の後ろにいた仲間

は皆、びっくり仰天、一、二分間もしゃがみ込んで、ほかに日本兵がいるか恐る恐る見張ったが、辺りはしんと静まり返っている。隊長から「前進」の合図が出され、一人ひとり「前進」と叫び、最後尾まで伝えられると、おれたちは立ち上がり、ゆっくり尾根を下った。その日、任務が終わってから、おれはみんなの笑い話の種にされた。というの、おれたちは一列になって山道を下ったので、全員、下腹部を丸出しにしたあ

の日本兵を跨(また)いで進まなきゃならなかったからだ。予定通り、おれたちは午前八時、目的地に到着し、着色発煙手投げ弾を爆発させ、上空の偵察機におれたちの位置を知らせた。すぐに、艦砲と野戦砲が発砲し、砲弾が眼下の安波連村落に降り注いだ。しばらくすると、退却する日本兵らが山を駆け上ってきた。およそ半時間、日本兵らは飛んで火に入る夏の虫とばかり、狙い撃ちにされた。二百人のジャップをやった、とだれかが言った。おれが見たのはせいぜい五十人ほどだ。おれたちの損害は二、三人の戦死者と、五、六人の負傷者だけだった。

※(注) これまでのいかなる戦記にも渡嘉敷の最南端の浜(ヒノクシ)にアメリカ軍が上陸したことは書かれていない。ところが、昨年筆者が渡嘉敷村の金城武徳さんから入手した「渡嘉敷第三戦隊の陣中日誌」に「三月二十七日：第一中隊は安波連より撤収するも渡嘉志久岬の敵に阻止され、突破すること得ず東方山中に潜伏：」との記録を発見した。第三戦隊はアメリカ軍が裏をかいて、渡嘉敷最南端から闇(やみ)を突いて上陸し、待ち伏せしたことを知らなかったのである。(ドキュメンタリー作家)

沖縄戦シヨウダウン

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

訳注・上原 正稔

3

「山を下りて阿波連の村を確保せよ」との命令を受けた。山を下りる途中、小川に出くわした。川は干上がり、深さ十メートル、深さ三メートルほどの川底のくぼみに大勢の住民が群がっている。

俺たちが姿を見せると、手投げ弾が爆発し、悲鳴と叫び声が谷間に響いた。想像を絶する惨劇が繰り広げられた。大人と子供、合わせて百人以上の住民が互いに殺し合い、あるいは自殺した。慶留間のと

身も危ない。全く手がつけられない。俺たちは「勝手にしやがれ」とばかり、やむなく退却し、事態が収まるのを待った。A中隊の医療班が駆けつけ、全力

き、年輩の男が拾ってくれた。その時、彼は俺がオキナワ戦に参加したことを聞くと、自分の息子はトカシキという島に行った将校だが、息子

戦シヨウダウン」が伝える「集団自決」の物語は目の前で事件が起きている点で特異であり、場所も人数もこれまでの報告と全く違う。一昨年末、「おきなわプラス50市民の会」の活動の中で、デ

観を覆してしまった。「注」としては長くなるが、われわれが真相を知ることが「人間の尊厳」を取り戻す、すなわち「おとな」になることだと信じているので許していた。だいたい。「沖縄戦シヨウダウン」はA中隊が阿波連の裏山で日本軍を待ち伏せしたことを伝えて

模がすさまじい点が違うだけだ。俺たちに強姦され、虐殺されるものと狂信し、俺たちの姿を見たおとたん、惨劇が始まったのだ。年輩の男たちが小

「やめろ、やめろ、子供を殺すな」と大声で叫んだが、何の効果もない。俺たちはナイフを手にして大人たちを撃ち始めたが、逆効果だった。狂乱地獄となり、数十個の手投げ弾が次々爆発し、破片がビュンビュン飛んでくるのでこちらの

ね。もちろん、本当のことを話してやった。

わ。もちろん、決現場へ案内していただき、海上挺進第三戦隊の陣中日誌を入手した。後に大城良平さん、比嘉喜順さん、知念朝睦さんらから貴重な情報入手することができた。

阿波連の集団自決については「三月二十九日一悪夢のごとき様相が白日眼前に晒（さら）された。昨夜より自決したるもの約二百名（阿波連方面においても百数十名自決、後判明）」と記録している。A中隊の一兵士の物語と第三戦隊の記録は見事に符合する。渡

「子供を殺すな」と叫ぶ

2日後、惨劇の現場を埋める

「やめろ、やめろ、子供を殺すな」と大声で叫んだが、何の効果もない。俺たちはナイフを手にして大人たちを撃ち始めたが、逆効果だった。狂乱地獄となり、数十個の手投げ弾が次々爆発し、破片がビュンビュン飛んでくるのでこちらの

を尽くして生き残った者たちを手当てしたが、既に手遅れで、ほとんどが絶命した。

※(注) 渡嘉敷島で何が起きたのか

ね。もちろん、本当のことを話してやった。

阿波連の集団自決については「三月二十九日一悪夢のごとき様相が白日眼前に晒（さら）された。昨夜より自決したるもの約二百名（阿波連方面においても百数十名自決、後判明）」と記録している。A中隊の一兵士の物語と第三戦隊の記録は見事に符合する。渡

き、年輩の男が拾ってくれた。その時、彼は俺がオキナワ戦に参加したことを聞くと、自分の息子はトカシキという島に行った将校だが、息子

無数の人骨が川を流れ落ちて来たそうだが、アメリカ兵が多数の住民を虐殺したせいらしい、と語った。俺たちが殺した、とは参った

わ。もちろん、本当のことを話してやった。

わ。もちろん、決現場へ案内していただき、海上挺進第三戦隊の陣中日誌を入手した。後に大城良平さん、比嘉喜順さん、知念朝睦さんらから貴重な情報入手することができた。

阿波連の集団自決については「三月二十九日一悪夢のごとき様相が白日眼前に晒（さら）された。昨夜より自決したるもの約二百名（阿波連方面においても百数十名自決、後判明）」と記録している。A中隊の一兵士の物語と第三戦隊の記録は見事に符合する。渡

嘉敷では「恩納ガーラ」と阿波連の川の上流で二つの「集団自決」があったことになる。
 筆者は金城武徳さんに渡嘉敷村落北の山中の「恩納ガーラ」へ案内してもらった。山頂の石碑のすぐ北に「自決」現場があった。だが、金城さんは、ここは恩納ガーラではなく、ウアーラヌフルモーで第一玉砕場と呼ばれていると言う。恩納ガーラは渡嘉敷村落のすぐ西側を流れる川の中流だったのだ。そこは深い谷間で空襲を避ける絶好の避難場所だった。この川岸に住民は避難小屋を造ったが、ここでは「集団自決」はなかつ

たのである。恩納ガーラの上流から険しい斜面を登り、北（ニシ）山を越え、ウアーラヌフルモーに達するのだが、現在、川にはダムができ、昔の面影はない。
 筆者は自分の思い込み呆（あき）れたが、さらに驚いたことに金城さんや大城良平さんらは「赤松隊長は悪人ではない。それどころか立派な人だった」というのである。そこで北中城村に住む比嘉（旧姓・安里）喜順さんに会って事件を聞くと、「その通りです。世間の誤解をといて下さい」と言う。知念朝睦さんに電話すると、「赤松さんは自決命令を出してない。私は副官として隊長の側にいて、隊長をよく知っている。尊敬している。嘘（うそ）の報道をしている新聞や書物は読む気もしない。赤松さんが気の毒だ」と言う。これは全てを白紙に戻して調査せねばならな

い、と決意した。
 （ドキュメンタリー作家）

沖繩戦シヨウダウシ

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

訳注・上原 正稔

4

(注) 渡嘉敷で何が起きたのか

昨年六月下旬、座間味出身の那覇市職員、宮城晴美さんは沖繩タイムス紙上で「梅沢裕第一戦隊長は住民に自決を命令したことはなく、援護法の遺族年金を得るには、梅沢さんの命令が不可欠だと村の有力者たちから言われ、母宮城初江はやむなくその手記で、梅沢氏の自決命令を書いた」と衝撃告白をした。

が存命中は公表してはならないが、いつか必ず発表してもらいたい、と伝えたのである。晴美さんは母の遺志に背いて沖繩戦後五十年目の年に真相を発表したが、晴美さんの勇氣ある証言は、沖繩の人々を沖繩戦の呪縛から一つ、解放し、一つ大人にしてくれたものと同じ。ところが、既に十年以上も前に、西日本新聞と東京新聞は梅沢裕さんの「無実」を報道していた。沖繩の新聞は一語もこのことに触れることはなかった。

新聞社、特に「鉄の暴風」を発行した沖繩タイムスの責任は重い。「赤松隊長の命令によつて恩納ガーラで集団自決が起き、梅沢隊長の命令で座間味の集

んはまだ存命中である。また、沖繩戦研究者の県職員某氏は梅沢裕さんの「自決命令は出していない」とする長文の手紙を入手しながら、新聞で公表するこ

とはせず、沖繩資料編集所紀要にその一部を載せ「自分の責任は果たした」としている。これは責任回避以外の何ものでもない。「紀要」など読む一般市民

ヌフルモアの悲劇の証言者は数多く、生き残っている。渡嘉敷村誌と陣中日誌などから「集団自決」への道をたどってみよう。

兵器で対空射撃を試みたが、この日、戦死者十一人、負傷者十人を出し、惨々の日となった。これが沖繩戦の始まりとなった。

島の人々の予想を超え進む事態

第3戦隊出撃できず

「集団自決が起きた」とする記述は四十年間のロングセラー「鉄の暴風」で一カ所を除いて書き換えられたことはない。

はいないのである。さて、話を渡嘉敷島に移そう。実はここでも同様の事件に発展していたのである。阿波連を流れるウフガーラの

発生した。述べ三百機の空襲は午後六時まで断続的に続き、島は大混乱に陥る。

艇は独断で、約百隻の三分の一の舟艇に進水

は、わすかばかりの銃

は、わすかばかりの銃

は、わすかばかりの銃

戦隊本部壕で第一、第二、第三中隊の隊長と協議し、那覇転進を決める。各隊は全舟艇の進水作業を決行。ところが、深夜第十一船舶団長大町茂大佐ら十五人が敵艦船の中を突破して渡嘉志久本部に姿を見せた。大町大佐は三月二十三日敵空襲が始まる直前、慶良間列島の配下部隊を巡視する目的で、座間味島に上陸、何の因果か、戦闘のど真ん中に巻き込まれてしまったのだ。

大町大佐は今、特攻舟艇を出せば、敵の警戒が厳しくなり、自分那覇の船舶団本部に帰るチャンスが失われると考え、赤松戦隊長に進水作業を中止するよう命令した。戦隊長は翌朝にも、敵が上陸せんとする状況では、今が戦隊が華々しく散る最後の機会だと考え、進水させるよう頼むが、船舶団長は聞き入れない。種々協議の結果、「戦隊は途中の敵を撃破しつつ船舶団長と共に那覇に転進する。出撃を準備せよ」との中途半端な命令が下る。

三月二十六日晴れ、早朝、慶良間に集結したブランドー提督の艦隊は慶良間各島に猛烈な艦砲射撃を加え、第七七歩兵師団が慶留間、阿嘉、座間味の島々に上陸した。渡嘉敷島の大町大佐が島を脱出する機会は失われた。赤松戦隊長は出撃準備のため、夜明け前に舟艇を海に出し、大町大佐に出撃を求めたが、大町大佐は「ここで手の内を晒(さら)せば、本島の船舶団の作戦に支障が出るので船を戻せ」と命令。だが、時既に遅く、

敵の艦砲射撃が始まっている。赤松戦隊長は涙をのんで「自決」を命令。こうして事態は島の全ての人々の予側を超えた方向へ進んでいった。

(ドキュメンタリー作家)

※注 「自決」と表記しているが、提出した原稿では「自沈」となっていたが、原稿データ入力時に「赤松戦隊長」自決命令を下した人物」という思い込みから「自沈」を「自決」と変更され、掲載された。

しかし、関係者の一人である比嘉喜順さんの指摘があり、次回の第5回で「自決」を「自沈」という訂正文が掲載された。

沖繩戦シヨウダウシ

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

5

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

(注) 渡嘉敷で何が起きたのか

三月二十七日 晴れ後雨、海上挺進戦隊とは爆雷二個を搭載した舟艇で夜間敵艦船に体当たの爆破する目的で編成された特攻隊。生きて帰ることはないはずだったが、特攻艇を自沈した今にわかづくりの守備隊として島に立てこもることになった。

リカ軍は艦砲射撃のもと、留利加波、渡嘉志久、阿波連に上陸を開始。渡嘉志久を守備する第三中隊の残存部隊は抵抗したもののほとんど戦死。阿波連を守備する第一中隊は阿波連を撤退する時、アメリカ軍A中隊の待ち伏せに遭い、多数が死傷し、生き残った者は阿波連東の山中に四散することになった。

前夜から「敵が上陸して危険だから恩納ガーラに移動せよ」と各地の避難壕を走り回った。渡嘉敷村落の西側の恩納ガーラには古波蔵村長、真喜屋先生(前校長)、徳平郵便局長ら村の有力者をはじめ数百人が集まった。古波蔵、徳平、真喜屋らの有力者会議が開かれ、「自決の他はない」と皆、賛成し自決が決められた。ある防衛隊員は「闘うために妻子を片づけよう」と言った。

前後は確かではないが、村の兵事主任新城は北山陣地に行き、赤松戦隊長に「住民をどこに避難させたらいいか」指示を仰いだ。赤松は陣地周辺が安全だろうと考えて「陣地北方の盆地に避難させてはどうか」と言った。そこがウアーヌフルモーだった。その後、恩納ガーラに防衛隊員がやってきて「赤松の命令で」

がオンナガーラに造ってあった避難小屋を目指した。昼間、ウフジシクビの谷間で過ごした。そこで村長と会ったが、村長は「連合艦隊がやってきて、アメリカをやっつける」と言った。夜、土砂降りの中、食料を置いてあるオンナガーラに戻った。伝令がやってきて、あっちこつちの避難小屋を巡り、「軍の命令で」

シの避難小屋にいたが「玉砕するから、北山の本部に集まれ」との連絡を防衛隊から受けた。グノースガイ(死に装束)をしてウアーヌフルモーに向かった。夜半から二十八日の明け方にかけて、数百人の老若男女が雨の中、恩納ガーラの上流から険しい傾斜面の道なき道を黙々と上って行った。

皆で「天皇陛下万歳！」斉唱

始まった集団自決

命令で村民は全員、直ちに陣地裏側の盆地に集まれ」と言った。別の防衛隊員は「自決するから本部前に集まれ」と言った。

北山に避難せよ」と伝えた。十六歳の小嶺勇夫はイチャジンの避難小屋で生活していたが、村の青年がやってきて「村長命令で上の本部に全員集結せよ」と言った。十四歳の山城賢治はウビガーラからオンナガーラに移動したが、「明日あたり玉砕」だという話を聞いた。三十歳の小嶺国枝はイチャジ

ウアーヌフルモーは北山の山頂すぐ北側にあり、馬の鞍(くら)のような形をして、長さ約三十メートル、六メートル、北に突き出て、その両端は深さ三、四メートルの溝をなし、その先は人が下りられないほどの深い溪谷が海に続いている。三月二十八日小雨、晴れ、夜小雨。夜間、敵情視察のため各地に散っていた部隊が夜明けとともに北山陣地に帰隊。道案内の防衛隊は家族とともに手榴(りゅう)弾で自決。

このような「自決」が二、三件始まっていた。ウアラヌ フールモーを埋め尽くした住民と防衛隊は黙々と「その時」を待っていた。防衛隊から手榴弾が手渡された。防衛隊員は自分の家族にまず、手榴弾を渡し、その使用法を教えた。天皇陛下のために死ぬ。国のために死ぬのだ。誰も疑問はなかった。恐ろしい鬼畜は砲弾を雨あられと降らし、今にもやってくるのだ。

陛下万歳！」と皆、両手を上げて斉唱した。村長は手本を見せようと、手榴弾のピンを外したが爆発しない。真喜屋前校長が最初に手榴弾を爆発させ吹き飛んだ。堰（せき）を切ったように、住民は我も我もと手榴弾を爆発させた。だが、不発弾が多いのか、使用法を知らないためか、爆発しないのが多い。手榴弾の数も足りない。「本部から機関銃を借りて、皆を撃ち殺そう」と防衛隊の誰かが言った。村長は「よし、そうしよう。みんな、ついてきなさい」と先頭に立って、三、四百ほど南の本部陣地向かった。住民はワアと叫んで陣地になだれ込んだ。その時アメリカ軍の迫撃砲弾が近くに落ち、住民はいよいよ大混乱に陥った。

「と懇願する少女もいる。西村大尉が太刀を振りかざし、「来るな、斬（き）るぞ」と叫ぶ。その時、住民の持っていた手榴弾が暴発し、破片が大尉に当たり、大尉は倒れた。赤松戦隊長は防衛隊に命じて事態を収めた。住民はウアラヌフルモー（第一玉碎場）と陣地東の谷間（第二玉碎場）に分かれ、戻っていった。「第二玉碎場」に向かった。金城武則は生き残った。そこでは、玉碎はなかったからだ。ウアラヌフルモーに戻った住民はどうなったか。陣中日誌は記す。

「三月二十八日午後八時過ぎから、小雨の中敵弾激しく住民の叫び声阿修羅の如く陣地後方において自決し始めた模様。三月二十九日曇雨 悪夢の如き様相が白日眼前に晒（さら）された昨夜より自決したるもの約二百名（阿波連方面においても百数十名自決、後判明）。首を縛った者、手榴弾で一団と成って爆死したる者、棒で頭を打ち合った者、刃物で首を切断したる者、戦いと言え言葉に表し尽し得ない情景であつた」（ドキュメンタリー作家）

訂正
前回（連載四）の末尾「赤松戦隊長は涙をのんで『自決』を命令」は、「自決」ではなく、「自沈」でした。

※注 新聞掲載当時の「金城武則」表記は「金城武徳」の誤りです。

本部陣地では仰天した兵士らが「来るな、帰れ」と叫ぶ。「兵隊さん、殺してください

た。兵士らは「来るな、帰れ」と叫ぶ。「兵隊さん、殺してください

沖繩戦シヨウダウン

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

6

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

ここまで長い(注)の「渡嘉敷島で何が起きたのか」を読んでいただいた。その意図は「事実」の発掘なくして「真実」の発見はあり得ないということだ。防衛隊だった大城良平さんは語る。

—私は自分の妻が自決したと聞き、中隊長になぜ自決を命じたのか、と迫った。中隊長は「全く知らない」と言った。赤松隊長は「村の指導者が住民を殺すので、機関銃を借してくれ」と頼んできたが断った」と話してくれた。赤松隊長は少ない食料の半分を住民に

分けてくれたのです。立派な方です。村の人で赤松さんのことを悪く言う者はいないでしょう——

比喜喜順さんは語る。

—赤松嘉次さんは人間の鑑(かがみ)です。渡嘉敷の住民のために一人で泥をかぶり、一切、弁明することなくこの世を去ったのです。私は本当に気の毒だと思えます。家族のためにも本当のことを世間にお知らせください——

国の援護法が「住民の自決者」に適用されるためには「軍の自決命令」が不可欠であり、自分の身の証(あかし)を立てることは渡嘉敷村民に迷惑

をかけることになることを赤松さんは知っていた。だからこそ一切の釈明をせず、赤松嘉次さんは世を去ったのである。一人の人間をスケープゴート(犠牲)にして「集団自決」

一つ脱皮して一つ大人になった気がする。だが、真実を知るのがあまりにも遅すぎた。赤松さんは帰らぬ人となってしまった。

渡嘉敷の戦争の物語は今、ほんの二ページが開かれただけである。次のページに何が隠されているのかだれも知らない。さて、長い(注)を終えてグレン・シアレスさんの語る本編に戻ろう。

夜間、住民が突撃

伊江島上陸、激しい攻防

の責任をその人間に負わせてきた沖繩の人々の責任は限りなく重い。筆者も長い間、「赤松は赤鬼だ」との先入観を拭(ぬぐ)い去ることができなかつたが、現地調査をして初めて人間の真実を知ることができた。今、筆者は読者と共に、

第二章 死体を片づけろにはウサギ狩りの手が一番

おれたちは数日、渡嘉敷島に残り、敗残兵を捕まえたり、狙撃兵を捜索したりした。最後に、上陸日に通った同じ山道に戻り、最初に上陸した海岸に出た。

おれたちはボートで近くの島々に行き、住民を集め、収容所に送った。おれたちが殺さないと分かると、住民はよく協力してくれた。中には、家族や親族の者を救出するため、自ら進んでおれたちと一緒に山に入る者もいた。その間、あの東京ロースはラジオで、おれたちが海に放り出された後、おれたちの妻や恋人は故郷で郷土防衛員と寝ているのだ、と放送していた。

四月一日、イースター(復活祭)の日曜日、おれたちは渡嘉敷の山頂に座り、沖繩本島上陸作戦を見守った。凄(すさ)ましい艦砲射撃の音が島まで響き、噴煙がもくもく上がった。味方がたくさん死んだだろうと思われたが、後で無血上陸だと知らされた。日本軍はわが軍の上陸に抵抗しないことに決

め、島の南端の要塞(さ)い陣地に立てこもり、防衛することにしたらしい。それから二週間、おれたち第七七師団は予備軍として待機することになった。LST艇に乗り、カミカゼ特攻機を避け、戦場から遠く離れることになった。

四月十六日、沖繩本島北西部の本部半島から二、三哩離れた伊江島に上陸した。伊江島は東西五哩、南北三哩のわりかし小さな島だったが、太平洋最長の滑走路があったから占領することになったのだ。またしても、おれたちはツイていた。危うく命を失うところだった。水陸両用車で狭い水路を進み、例のごとく鉄のはしけを下ろそうとしたが、どういうわけか、鉄のケーブルが途中で引つ掛かってどうしてもはしけが下りない。おれが飛び下ので、とんでもない物を見つけた。はしけが下りるはずの砂地に大型爆弾の地雷が仕掛けられていたのだ。ケーブルが止まらなきや、おれたちは皆、吹き飛ばされて、おだぶ

つとなるどころ
だった。

おれたちのA中隊は先頭を切つて滑走路を横断した。日本軍はおれたちの離着陸を妨げんとして、サンゴ石の滑走路表面をギザギザに切り刻んでいた。溝の深さは一・二メートルほどで、二、三百メートルおきに掘られていた。滑走路を横断している途中、日本軍のゼロ戦特攻機が樹木の上をかすめて、おれたち目がけて突っ込んできた。敵飛行士は高度の判断を誤つたに違いない。溝のそばに積み上げた土石の山にプロペラを引掛かけ、スキップすると、機体を傾け、四百メートルほど滑つて、草むらに突っ込み、逆さになって、スローモーションでそのまま進み、止まった。飛行士が

操縦席を抜け出して、草むらに向かつて逃げ出した。島の中央には小さな火山のようなすり鉢山（グスク山）イージマタツチユ）がある。そこから敵がおれたちの動きを見張っていたが、おれたちが飛行士を追つかけるのを見ると、奴らは四〇ミ対空砲火をおれたちに向けてきた。だが、おれたちはその飛行士を捕まえることができた。

運悪く、仲間の一人の近くに砲弾が落ち、致命傷を負つた。一、三分後、戦友は死んだ。砲弾の破片が生殖器を引きちぎり、下腹部を切り裂き、はらわたが飛び出している。その夜、おれたちは滑走路の近くの地雷源の麦畑に塹（ぎん）壕を掘つた。夜間、麦畑の中を多数の住民が身体に爆雷を巻き付け、突撃してきた。おれたちは奴らのほとんどを銃でやつけたが、爆雷が爆発すると、肉片が四方八方に飛び散つた。五メートルの大腸が藪（やぶ）に引掛かっていた。肩や腕や足の断片、何でもこ

ざれた。

全師団は島の中央のグスク山攻略を目指していた。そこには日本軍も住民も集結していた。奴らはモグラのように地中に潜み、丘の斜面に数十のトーチカを高く構築し、奴らの砲火が平地におれたちがいる所だが一をなめ尽くす算段だ。

上陸三日後、有名な従軍記者、アーニー・パイルが戦況視察のため、伊江島にやつてきた。三〇五連隊と三〇六連隊の陣地を訪ねてきた。せつかくの機会だからと、おれたちは、飲み水が油で汚染し、腹痛を起こしている。これは、海軍の野郎がわざとやつているに違いない、とアーニーに不満をぶつけた。アーニーは調べてみよう、と言つた。
(ドキュメンタリー作家)

沖縄戦シヨウダウン

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

7

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

アーニー・パイ
ルと将校の一人
がジープに乗り、
前線に向かった
時、敵の機関銃
が火を噴いた。
二人はジープか
ら飛び降りると、
近くの溝に走り
込んだ。将校は
ずっと身を伏せ
ていたが、アー
ニーは頭を上げ
て、様子を見よ
うとした。途端
に銃弾が頭を貫
通した。おれた
ちA中隊の全員
が、アーニーを
殺（や）った
ジャップを殺し
に出撃したが、
やつつけたかど
うか疑わしい。
翌日、おれたち
はグスク山に向

かった。日本軍が斬
（き）り込み隊を送っ
てきたので、その夜は
休む暇もない。住民の
群れがおれたちの前線
をすり抜けて逃げてき
たが、多くの者が殺さ
れた。子
供を背
負った母
親もいた。
一人の若
い親は一
発の銃弾
で心臓を
撃ち抜か
れ、その銃弾が背中の
乳児の頭に孔（あな）
を開けていた。
四月二十一日、夜明
けと同時にシャーマン
戦車が出動し、おれた
ちはジャップの息の根
を止めることになった。
だが、出動早々、気ま
ずいことが起きた。お

れは分隊の連中が戦闘
準備の用意ができてい
るか見回りに出た。と
ころが、訓練学校時代
からの戦友が砲弾穴で
ぐうすか寝ているんだ。
おれは空葉莢（きよ

グスク山へ最後の前進
をすることになったが、
おれの仕事は小隊の戦
車の三十メートル先の地雷
探知作業だった。当然
のことだが、戦車はふ
たを固く閉じ、戦車の
中の運転手が覗（のぞ）
げるのは潜望鏡の
視界だけだ。おれの姿
は運転手の視界に入ら
ないから、地雷がある
ぞ、と合図するには戦
車まで駆け戻り、ハッ

はずの兵士が吹き飛ん
だ。戦車の乗組員は
びっくり仰天、ハッチ
から飛び出て、逃げ出
した。
おれたちがグスク山
に近づくと、野戦砲が
火を噴き、日本軍の一
〇五ミリ高射砲陣地をた
いた。これで、敵の
攻撃が下火になった。
その時まで、A中隊
の二割が倒れていた。
午後一時、全員が配置
に就くと、
おれたち
は一斉に
山を駆け
登った。
集中砲火
がおれた
ちに浴び
せられ、
多くの者

戦闘で残ったのは6人

アーニー・パイル撃たれる

う）をどざりと、あい
つの上に投げつけて、
起こしてやったところ、
あいつはかんかんに
なつてかみついていた。
おれたちは皆、神経が
張り詰めていたんだ。
一時間後、あいつは戦
死した。
平坦な畑を横切つて、

チをガンガンたたかね
ばならない。戦車の前
方を行くおれたちは敵
の機関銃の餌食（えじ
き）になり、次々倒れ
てゆく。それでもおれ
たちは前進を続けた。
おれたちの右翼の第二
小隊の戦車が地雷を踏
み、地雷を探していた

が倒れた。分隊長の
デュークもその一人
だった。仲間を殺した
日本軍陣地の機関銃を
火炎放射器で何とかお
となしくさせたが、日
本兵どもは殺される前
にデュークを殺したの
だ。おれは山頂に続く
小道を見つけ、分隊の

残存兵を呼び寄せ、つ
いてこい、と言った。
おれたちは山を駆け
登った。小道の両端に
塹（ざん）壕が並んで
いたが、おれたちは走
りながら、手投げ弾を
塹壕という塹壕に投げ
入れた。おれたちの前
方で一人の日本兵が塹
壕から飛び出し、手投
げ弾をおれたちに向
かって投げ、視界から
消えた。その瞬間、塹
壕の中で轟音が響き、
塹壕が踊るように震動
した。少なくとも二十
人の日本兵が自殺した
にちがいない。おれた
ちには負傷者は出な
かったが、後でおれの
スポンにいくつも破片
が通り抜けた跡がある
ことに気づいた。

まだ、足腰の立つお
れたち七人は斜面の頂
点に達し、頂上の敵機
関銃を黙らせたが、そ
の前に仲間の一人が殺
され、とうとうおれた
ちは六人になった。グ
スク山の頂上には切り
立った岩があったが、
今やそれもおれたちの

背後にあり、そこから見下ろすと日本軍の要塞（さい）は斜面の下からの攻撃には強いが、上からの攻撃には無防備だということが一目瞭（りょう）然だ。大勢の日本兵どもがおれたちの眼下で殺してくれとばかり、這（は）いつくばっている。おれたちのことは露（ろ）ほども気づいていない。おれたちはいとも簡単にやつらを仕留めた。四方八方で銃弾が飛び交い、どこから飛んでくるのか、やつらには分からなかったのだ。二時間ばかり、戦場は静かになった。A中隊の将校が山を登ってきて、死体を数え始めた。信じられないか

もしれないが、戦闘中は将校なんていなかったのだ。兵を率いて敢然と戦う将校は、どこかに消えちまっていたんだ。おれたちはこの戦闘で中隊の半数以上を失った。おれたちの分隊で生き残ったのは六人だけだ。そこで中隊長はおれに分隊の指揮を執れ、と命じた。それまでおれは、新参兵だったのだ。自動小銃を携帯していた分隊長が戦死したので、おれが代わりに自動小銃を携帯することになった。その後の伊江島の掃討戦の間、おれは自動小銃を片時も手離さなかった。自動小銃は分隊長の印（しるし）であり、おれの誇りとなった。（ドキュメンタリー作家）

沖繩戦シヨウダウン

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

8

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

伊江島を占領して次の二、三日は、敗残兵を殺したり、敵の死体を埋めたりして時を過ごした。死体が山のように積み重なっていた。おれたちは死体を引きずって砲弾穴に投げ入れた。子供のころ、叔父がよく語ってくれたことがある。木の空洞に隠れているウサギを引きずり出すには、さおの先にフオークを付け、それをウサギの皮に突き刺し、ひとひねのしてから引きずりだすのが一番さ。おれはその話を思い出

し、丈夫な木の枝の先にフオークを取り付け、死体の衣服に巻き付け、引きずったのだ。数人の日本兵が滑走路のぞばの塹(ざん)壕を再度、占領したという連絡が入った。おれたちは十二、三人がやつらをやつつけることになつた。白リン弾が塹壕に投げ込まれると、五、六人の日本兵が、たまらず外に飛び出してきたが、そのうち何人かの衣服に火がついていた。そこを狙い撃ちにして、ぶっ殺した。その時、小型偵察機がおれたちの上空を旋回

しているのに気づいた。紙飛行機をでっかくした程度の大きさだから知れている。そいつが溝と溝の間の滑走路に着陸すると、ほやほやの日本兵の死体が転

ろが、翼が盛り土に引っ掛かり、車輪が泥に突っ込んだ。おれたちは塹壕の上でこのシヨウを見物していた。操縦士はおれたちの所に来ると、威張りくさつて命令した。「おれの偵察機を泥から引き揚げろ」。おれたちは噴き出した。そして言つてやつたんだ。「おれたちは実戦歩兵部隊だ。紙飛行機で遊んでいる空軍じゃない

の時、運良く、わが中隊長と将校が様子を見るため、滑走路を車でやってきた。高慢ちきの空軍将校は中隊長に向かい、身振り手振りよろしくおれたちをこきおろしている。中隊長は黙つて愚痴(ぐち)を聞いていたが、その将校が話し終えると、やんわりと質問した。「ところで、お願いますと頼みましたか」。あの空軍将校は

た。その途中、第七七師団の臨時墓地を見た。アーニー・パイルの戦死地点を示す標示板と、山と積まれた数百の軍靴の姿が今も険(まぶた)に焼き付いている。LST艇に戻ると、シャワーを浴び、着替えた。周辺には多数の船舶が停泊していた。タヤみ迫るころ、どこからともなくカミカゼが現れ、海面すれすれに、おれたちに向かつて飛んできた。カミカゼが機体の腹に爆弾を抱えているのが見える。またしても、ツイていたが、船の対空機銃士は機銃の点検を終わ、弾倉に弾薬を装填(てん)したばかりだった。カミカゼを見るや、対空機銃をガガガッと発射した。弾は目標をそ

沖繩本島へ上陸

新参兵がわが隊に配属

がっている所にゆつくり滑走してきた。磨きたてのカッコイイ操縦士がボンと飛び出してくると、死体に駆け寄り、戦利品を捜し始めた。小銃やら何やら拾い集めると、愛機に戻り、飛び立とうとして一回転したとこ

ぞ」。そいつは怒り出し、命令不服従は軍法会議だ、と脅した。将校は実戦部隊に敬意を示すものだということが知られないんだ。保安上の理由で、前線では将校を「サー」と呼ぶことは決してないし、敬礼もない。そ

「たもんだ。」「どうか。偵察機を泥から引き揚げていただけませんか」。おれたち全員どつとやつの愛機に駆け寄り、難なく泥から引き揚げた。これで一件落著つてわけだ。その後、二、三日、地雷除去と死体埋葬作業を続け、それから村の通りを歩いて海岸に出、沖のLST艇に向かっ

た。その途中、第七七師団の臨時墓地を見た。アーニー・パイルの戦死地点を示す標示板と、山と積まれた数百の軍靴の姿が今も険(まぶた)に焼き付いている。LST艇に戻ると、シャワーを浴び、着替えた。周辺には多数の船舶が停泊していた。タヤみ迫るころ、どこからともなくカミカゼが現れ、海面すれすれに、おれたちに向かつて飛んできた。カミカゼが機体の腹に爆弾を抱えているのが見える。またしても、ツイていたが、船の対空機銃士は機銃の点検を終わ、弾倉に弾薬を装填(てん)したばかりだった。カミカゼを見るや、対空機銃をガガガッと発射した。弾は目標をそ

ら一^キほど先の
LST艇めがけ
て突っ込み、大
爆発が起きた。
後で聞いたが、
十一人ほどの海
兵隊員が死に、
敵飛行士の腕や
足のとれた胴体
が、衝突地点か
ら遠く離れた船
員寝棚で見つ
かったというこ
とだ。

第三章、良い

日本兵、ほど臭
いものはない

翌日、おれた
ちは沖縄本島に
上陸した。読谷
飛行場で野営し
たが、そこで兵
員補充が行われ
た。沖の船から
やってきた新参
兵ばかりで、み
んな地獄の第一
日を迎えた罪人
の顔付きだ。戦
争の初体験が地
獄の最前線とは
気の毒だ。おれ
が初めて参戦し
た時はツイてい

た。仕事と言えば、偵
察と狙撃兵を捜すだけ
だった。ここは前線か
らわずか数^ヤで、大砲
の発射音が聞こえ、一
瞬爆弾が落ちると爆発
の振動が地面を伝わっ
て響く。六人の新参兵
がわが隊に配属され、
分隊の兵力は元に戻っ
た。翌日、おれたちを
乗せたトラック軍団は
最前線を目と鼻の先に
望む地点へ向かった。
現場に到着する直前、
猛烈な敵の砲攻撃がお
れたちのトラック軍団
を襲った。トラックは
急回転して、スピード
を緩めた。荷台の俺た
ちはしりに火がついた
かのように車から飛び
降りた。トラックから
全員が飛び降のたちよ
うどその時、直撃弾が
トラックに命中し、燃
え上がった。運転手は
吹き飛ばされ、即死し
た。おれたちの新参兵
六人は皆、無傷だった
が、大切な教訓を学ん
だはずだ。戦場ではモ
タモタしやならない。
死に神は目と鼻の先に

待ち構えているのだ。
(ドキュメンタリー作
家)

沖縄戦シヨウダウ

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

9

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

(四月の末、グレン・シアレスの七七師団は沖縄本島の中央で苦戦を強いられ、九六師団と交代することになり、我如古の南で戦線につく)

おれたちは前線と平行して走る低い尾根の裏手にいた。尾根の北側には強固なコンクリートの墓が並び、墓の真ん中の小さな入の口は縦一列、横六十センチ、コンクリートの塊で塞(ふさ)がれている。敵砲弾を避けるため、おれたちは墓まで駆け寄

り、墓の入り口を開けた。中には骨の入った骨壺が多数置かれていた。骨壺を外に出し、避難場所をつくった。やがて、砲声がやみ、おれたちは墓から出て、塹(さ)ん)壕を掘り、夜営した。

その夜、日本軍は次から次へ、斬(き)り

込み攻撃をかけてきた。日本兵が墓から続々姿を見せた。日本軍は尾根の南側に壕を掘りそこから数本のトンネルがおれたちのいる尾根の北側の数力所の墓に通じていたのだ。ほとんどの斬の込み兵の武器は手投げ弾だけで、

命を捨てる作戦だ。夜が明けると、墓石の山と名付けられたこの山を粉碎する作戦に出た。洞くつを片っ端から吹き飛ばし、素早く、一歩ほど南進した

きつぶされたシャーマン戦車がここにも、あそこにも転がっていた。日没までにおれたちは山を制圧した。

その夜、東翼の第七師団がおれたちの陣地に移動してきて、おれたちは西翼の九六師団陣地に移動した。おれたちが一個小隊ずつ移動する時、日はかなり高くなっていた。日本兵どもは右側の高地か

から、解放される兵士が喜ぶのも無理はない。おれたちが塹壕に飛び込み、九六師団の連中が這(は)い出ようと、すれ違った時、その一人がおれの顔を見て尋ねた。「シアレスさんですか」。おれは「どこかで見た顔だね」と言った。「ドン・ホワイトです」。ひげは伸ばしっ放しで汚れているが、確かに高校の級友だ。

「幸運を祈る。運

良く命があれば、また会おう」と言って、

「ドン後は方

に行った。数カ月後、カリフォルニアの病院であいつに再会したら、おれと出会うまで数分後、砲弾の破片で負傷したということだ。おれたちの陣地は敵の目にさらされ、絶えず敵襲の危機にさらされていった。夜になると、

おれたちの戦線に斬り込み攻撃が続いた。おれたちのすぐ前方の前線地区には日本兵の死体が散乱し、かなり腐敗が進んでいた。どこへ行っても腐肉のおいが染みついてとれない。

生暖かい毎日で、死体がパンパンに膨れ、ハエがたかるのに時間はかからない。その同じハエがおれたちの配給食目がけて群がってくるわけだから、夕マったもんじやない。仰向けに転がっている、良い日本人は腹がパンパンに膨れ、皮は張りつめ、硬直した足を引つ張り上げる。かつてアメリカでは

「良いインディアンは死んだインディアンだけだ」と言われていたが、今では「良い日本人は死んだ日本人だけだ」という言葉に変わっていた。やつらが全員、良い日本人になつていて、確認するため、おれたちは時々、死体の腹に弾

日本兵が斬り込み攻撃

前線地区は死体が散乱

所で、これも前線に平行に走る低い尾根に出た。その間、おれたちは絶えず前面の敵トーチカの機関銃や軽野戦砲の猛烈な攻撃にさらされていった。戦車は地雷を踏み、直撃弾を受けた。おれたちが通った道の両わきにはたた

らおれたちを見張り、歓迎式とばかり、猛烈な砲撃を浴びせてきた。おれたちの分隊は低い砂山の陣地に入った。九六師団の連中は喜び勇んで陣地を出て行った。この陣地は島中央の最前線地区、つまり地獄のど真ん中だった

丸を撃ち込んだ。すると、ピューとガスが抜けてくる。たまらないにおいだ。おれたちの食糧も水も、何もかも嫌なにおいが染みつくのだ。

おれたちがこの陣地に着いたその夜、突然どこからともなく数人の日本兵が姿を現した。実際、どこからやって来たのか分からなかった。だが、海軍の照明弾に照らされた敵の人影でその理由が分かった。ふつう、照明弾が上がってパラシュートで落下する二、三分間、昼間のように明るい。照明弾は約十分間隔で発射される。日本兵は照明弾が消えるのを待ち、三人組が暗がり走り、おれたちの塹壕の近くに倒れている死体を二人が拾い、引き揚げ、後の一人は死体の代わりに横になり、死んだふりをする。次の照明弾が消える前に、おれたちの眼前に手投げ弾や爆雷を手にした日本兵がいる、というわけだ。おれたちは腹いせに、ひと晩中、日本兵の死体を撃ちまくった。プシュー、うえー臭い。プシュー、うえー臭い。

後方地区から敵の狙撃兵がおれたちを狙った。数個分隊が派遣されたが、発見できない。すぐにも、また狙撃弾が飛んでくるだろう。実際、仲間が一人、腹を撃ち抜かれた。許せない。おれは志願して、その狙撃兵を捜すことにした。壊れた農家の屋根のわらが動いた。小銃の銃口がよきよきと出てきた。おれたちは一斉射撃で狙撃兵をやっつけた。隊長に証拠を見せるため、おれはその、良い日本人の両耳をナイフで

切り取り、戦利品の小銃と一緒に隊長に届けた。隊長は、よくやった、と言った。
(ドキュメンタリー作家)

沖繩戦シヨウダウン

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

10

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

第四章

五月四日夜明け前だった。日本軍最高司令部は総反撃命令を出した。敵出撃前、おれたちが経験したこののではない凄（すさ）まじい敵の砲攻撃が始まった。どれほど腹が座（すわ）ってしようとなしに唸（うなり）り声を上げて飛んできて、自分の近くで次々、爆発してみる、だれでもガタガタ震え出し、歯はガクガク止まらないものだ。爆発の風圧で耳は塞（ふさ）が

れる。大声を出すと、鼓膜の内と外の気圧が平衡になり、いくらか助けになる。その夜、おれたちは何度も何度も大声で叫んだものだ。おれは至近距離での爆発で慄（ぞん）壕（ごう）から吹き飛ばされ、山を転げ落ちた。命は助かったものの、衝撃で右の鼓膜はイカレ、軍用眼鏡のレンズに細かいひびが入って見えなくなった。日本兵どもは友軍のこの凄まじい砲攻撃の中、自分の命もなんのその、至る所でアメリカ軍戦線（せん）を走り抜け、俺（おれ）たちの背後に

深く侵入した。おれたちの前面よりも背後に敵が多いのじゃないかと思えたほどだ。照明弾（しょうめいだん）が上がり、おれたちには走（は）ってくる奴（やつ）らの姿（すがた）がはっきり見えた。

ドイツ降伏後、最後の決戦 生き残るチャンスはないと覚悟

おれたちは発砲しては弾（たま）を詰め、弾（たま）を詰めては発砲（はつぱう）した。おれが気が掛（か）かりだったのは、自動小銃（じゆうどうせうじゆ）が過熱（かねつ）してイカれることだった。A中隊（ちゆうたい）は爆弾（ばくだん）穴（あな）の周囲（しゅうい）に陣（ちん）を固（か）め、穴（あな）の底（そこ）には中隊司令（ちゆうたいしやうりやう）部（ぶ）があつた。夜（よ）が明（あ）けてから知（し）

たのは、四十人ほどの日本兵（にっぽんへい）が穴（あな）の中にいて、奴（やつ）らは司令部（しやうりやうぶ）の将兵（しやうへい）ら（ら）を皆（みな）殺（ころ）しにしていたことだ。自動銃（じゆうどうじゆ）を持つ（も）つている者はすべて、穴（あな）の周囲（しゅうい）を固（か）めよ、と口伝（くちでん）えに命令（めいれい）が出（で）され、おれたちは一斉（いつせい）射撃（せつげき）で奴（やつ）ら（ら）を残（のこ）らず片（かた）付（つ）けた。後（ご）で分（わ）か（か）つたことだが、約（やく）五（ご）千（せん）人（にん）の日本兵（にっぽんへい）どもが七（しち）七（しち）師（し）団（だん）の戦線（せん）の中（ちゆう）央（やう）を攻（こう）めたそう（そう）だ。おれたちの中隊（ちゆうたい）地区（ちきう）には

を吹き飛ばされそこなつた敵将校（てきしやうがう）がいた。ひどく威張（い）張りくさつた奴（やつ）で、病院（びやういん）に連れて行（い）け、と命令（めいれい）したんだ。完璧（かんぺき）（べき）な英語（えいご）だった。ジュネーブ条約（じゆねーぶじやうやく）を知（し）っているか。お前（おまえ）らはすべての負傷（ふしやう）兵（へい）を介抱（かいぼう）する義務（こむぎ）があるぞ！ おれの部下（ぶか）が叫（な）んだ。クソ（くそ）つたれ死（し）んじまえー！。そして、銃（じゆ）の引き金（ひきか）を引（ひ）いた。横柄（よこがら）な敵将校（てきしやうがう）が死（し）んだ。

ひどい惨状（さんじやう）だつた。やがて、大型（だいたい）ブルドーザー（ぶるとおざー）が二（に）三（さん）台（だい）やってきて、敵兵（てきへい）の死体（したい）を続（つ）々（つ）々（つ）爆（ばく）弾（だん）穴（あな）に押し込（こ）んで、土（つち）をかぶせ、どうにかほとんどの死体（したい）を片（かた）付（つ）けた。中隊司令（ちゆうたいしやうりやう）部（ぶ）のあつた爆弾（ばくだん）穴（あな）は、アメリカ軍将兵（しやうへい）ら（ら）の死体（したい）を運（は）び出して後（ご）、同（どう）じように埋（う）めた。翌（あした）日（にち）、砲（ぱう）弾（だん）がその穴（あな）を直撃（ちくげき）し、腐（くさ）

かけた日本兵（にっぽんへい）の死体（したい）の肉片（にくぺい）が四方（しやうはう）、八方（はつぱう）に吹き飛（と）んだ。戦死（せんし）した将校（しやうがう）に代（た）わつてやつてきた補充（じゆく）将校（しやうがう）らは前方（しやうはう）四（し）百（ひやく）の丘（かみ）陵（りやう）線（せん）を攻（こう）略（りやく）する許可（きょこ）を得（え）ていた。補充（じゆく）将校（しやうがう）らは腐臭（くさくさ）に耐（た）えかね、早（はや）目に先（ま）に行（い）きたかつたのだ。おれたちを悪臭（あくくさ）から遠（とほ）ざけようという思（おも）いやり（やり）つてやつた。幸（さい）いにも、風向（かぜむき）が変（か）わり、おれたちもいくらか息（いき）がつけた。次（つぎ）の二（に）、三（さん）日（にち）、おれたち（たち）は敵（てき）の塹壕（ざんごう）（ざんごう）を占（し）拠（きょ）したり、トーチカ（とーチか）を爆（ばく）破（ぱ）しながら、少し（すこ）しばかり前（ま）進（しん）した。火（ひ）炎（えん）射（せ）器（き）で無（む）数（すう）の洞窟（どうくつ）を焼（や）き払（は）つた。またしても、おれたち（たち）の周（しゅう）りには、善（ぜん）い日本人（にっぽんじん）の山（やま）がで（で）きた。

五月（ごご）八（はち）日（にち）の朝（あさ）、おれたち（たち）は重要（じゆうやう）塞（さい）攻（こう）略（りやく）のた（た）め、戦車（せんしゃ）の横（よこ）に並（なら）び、出撃（しゅつげき）せんとした。その時（とき）、ドイツ（どいつ）降伏（かうふく）の大（だい）ニ（ニ）ュ（ュ）ース（ース）が伝（でん）えられた。が（が）つ（つ）くり！ 戦（せん）争（そう）はほとん（ほとん）ど終（しゆう）わつたとい

うのに、今、おれたちは地獄の罌(わな)に飛び込もうとしている。ほんとにがつくりきた。この時が俺の軍役時代の最低の瞬間だったと思う。

多数の犠牲者を出しながらおれたちは進撃した。後に、与那原―首里―那覇戦線と呼ばれることになった戦線にぶつかっただ。ここを日本軍は奴らの死線と決めていたのだ。何が何でも守り抜くつもりだ。おれたちは今、最後の決戦場にやっつて来た。敵はおれたちに地獄の苦しみを与えている。訓練学校の仲間は今ではほとんどいない。このころになっておれは感じ始めた。

生きて故郷に帰ることはあるまい。生き残るチャンスはほとんどないのだ。そう覚悟を決めたから、おれはまともな兵士でいられたのだ。

ここは文字通り、敵と味方が目と鼻の先で殺し合う戦場だった。敵にはもう逃げ場はない。奴らは毎晩、玉砕攻撃で、おれたちの戦線に斬(き)り込んでくる。おれたちはいつも奴らの手投げ弾の届く範囲にいた。ありそうもない話だが、おれたちは実際、日本兵どもがわんさと立てこもる洞窟の上で塹壕を掘って構えていた。多くの仲間が倒れ、手が足りなくなつたので、多数の補充兵が船から送られて来た。わが分隊の生き残つていた兵士は、死んだ仲間を担架に乗せて去って行った。死の集合地点では二十五人の新参兵が待っていた。全員、ピカピカの戦闘服を着、死刑台に連行される死

刑囚の顔つきをしている。
(ドキュメンタリー作家)

沖縄戦シヨウダウン

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

11

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

前線ではいつも水不足だ。この時、おれたちは本当に干上がっていた。死者に捧げる聖水五ツの水缶を車から取り出した。運転手は文句を並べた。武器を持って戦いもせず、文句を言う資格などあるものか。おれたちは自分の水筒を満たし、残りを全部飲み干した。最前線陣地に新兵を連れて来た途端、猛烈な迫撃砲攻撃の洗礼を浴びた。敵の新参兵歓迎式典だ。敵兵と近所付き合いをしているうちに、おれたちは夜間、おれたちの穴に投げ込まれる手投げ

弾にも慣れてきた。敵の手投げ弾はシユシユと音を出し、火花を散らすので、おれたちは「火事だ！穴の中が火事だ！」と叫んで、穴から飛び出し、二、三秒後、爆発する。それから穴に戻るといふわけだ。予備の弾薬は穴の外に置いてあるのど被害は、ほとんど被害はない。あまりにも多くのやつが戦闘疲労症でイカれちまうので、四人組で塹(ざん)壕に固まれ、との命令が出た。新参兵二人と古参兵二人の組み合わせだ。古参兵って？だれでも前線で一週間以上持ちこたえたやつの一

とき。おれたちは新参兵に、穴に手投げ弾が投げ込まれた時の手筈を教え、その夜、新参兵の一人が恐怖で身体が凍てつき、爆死した。戦争体験の初めから、

後頭部まで、まるで肉切り包丁で切ったかのようになり、真つ二つに切れている。その脊椎(せきつ)い)はきれいに縦に分断され、肺臓部分は完全に空洞になり、頭蓋(が)骨は失われているが、脳はそのまま残っている。おれたちが穴から彼を引きずり出した時、脳が丸ごと地面に転げ落ちた。おれたちは塹壕掘りのスコップで脳をすくい上げ、空洞に

手投げ弾一個か二個を手に、じりじり近付いてくる。やつらは音もなく忍び寄り、目と鼻の先に来るまでおれたちは気づかない。おれは反射的に自動小銃をやつの耳に突っ込み、引き金を引いた。やつは頭はスイカのように割れ、脳みそがおれたちに降りかかった。やつは武器は手投げ弾一個だけだった。二人の補充兵がイカれちまう。穴の底に隠れ

た。おれは二人をけ飛ばして、立たせた。一人が泣きべそをかいた。おれは「ぼくは訓練学校で小銃の訓練を受けてないのです。だれも訓練を受けずに学校を卒業するやつはいないし、それで戦場に送られるやつもない。だれもだ。その夜、幸いにもおれたちはこれ以上手投げ弾を浴びずに済んだ。」

続出する戦闘疲労症

絶え間なく襲う死の恐怖

おれは致命傷というものを外科医のような眼で見つけた。どういう理由か、おれはバラバラになった死体を見ても恐怖を感じない。そこで、手投げ弾で殺された新参兵の様子を説明しよう。明らかに手投げ弾は彼の背中と壁の間で爆発している。尻から

なった肺に突っ込んだ。おれたちは彼を担架にうつぶせにして乗せた。その夜、至る所で斬の込み隊が地面を這(は)つてやつて来た。手投げ弾の爆音と機関銃の応酬が休みなく続いた。照明弾の明かりが消えると、やつらがやつて来る。武器は

「ぼくは訓練学校で小銃の訓練を受けてないのです。だれも訓練を受けずに学校を卒業するやつはいないし、それで戦場に送られるやつもない。だれもだ。その夜、幸いにもおれたちはこれ以上手投げ弾を浴びずに済んだ。」

だが、今でも説明のつかない不思議なことが起きた。突然、夢の中に妻のルビーがはつきり現れ、おれを揺すり、「起きて、グレン。起きて」と叫んだのだ。目を醒(さ)ますと、月が出て、しんと静まり返っている。見張りについているはずの戦友はだらしなく寝込んで

第五章 夢の中のルビー

でいる。ちょうどその時、月明りの中、穴のすぐ横に黒い人影が立ち上がった。手にはシュツシュツ火花を散らしている手投げ弾を持ち、そいつをおれたちの真上に落とさんとしている。おれはいつも自動小銃を膝に置き、指も引き金に当たって眠るのだが、おれは自動小銃をさっと上げ、引き金を引いた。弾は日本兵の胸に命中し、やつは手投げ弾を握ったまま後ろにひっくり返った。手投げ弾が爆発した。やつは吹き飛ばされ、長い腹わたがおれたちの上而降ってきた。三人の仲間は、ショック状態だ。見張りの戦友は穴の底で一晩中

泣いていた。翌日、彼は戦闘疲労症で運ばれて行った。後になって、グアムーハワイ間の患者輸送機の中で、損架に乗せられた彼の姿を見た。おれが話し掛けたも、おれと目を合わせることもできない。あいつは勇敢な兵士だったんだ。哀れな話さ。夢の中のルビーがおれたちの命を助けてくれたって話はだれにもしなかった。どうせ、戦争で頭がイカれちゃった、と言われるだけだ。だが、生と死の境で戦っている者には信じられないことが二度も三度も起きるものだ。(ドキュメンタリー作家)

沖縄戦シヨウダウシ

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

12

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

おれたちは与那原——首里——那覇戦線で苦戦していた。七七師団は島の中央から首里に向かっているが、敵は死にも狂いで守っている。

おれたちの陣地を東に抜け、チョコレート・ドロップ・ヒルを攻略することになった。本来はおれたちの三〇六連隊が攻略すべき丘だったから、おれたちも戦える者は三〇七連隊に参加することに決めた。おれたちが丘の麓（ふもと）に達するまで、砲撃が援護したが、丘に登れば、そこからは自力で身を守らねばならない。砲声がやむと、日本兵どもが狂犬のように飛び出てきて、おれたちは多数の死傷者を出した。丘の中腹で、おれたち

撃を次から次へ、発射している迫撃砲陣地にぶつかつた。

おれたちは迫撃砲陣地の四人の敵兵を自動小銃の一連発で倒した。おれたちはこれまで多くの敵

分を碎き、おれの左手を貫通し、別の銃弾がおれの左の胸に当たり、左腕上腕部に抜けた。おれたちはルビーからの手紙をすべて束ねて、いつも左胸のポケットに入れていたから、それ

がおれの命を救つたのだと信じた。今でも、それが弾丸をそらせたのだと信じている。弾丸は心臓をわずかに、三センチほどそれたのだ。同時に、弾丸はおれの

ぞ」と言った。どのようにして陣地に戻つたか、全く覚えていない。後で病院で会つた兵士の話では、おれたち腕を押さえて、びよんびよん跳びはねながら、撃つな、撃つな、と叫んでいたということだ。一人の日本兵が機関銃でおれを狙い、おれの背後で泥がピュンピュンはねていたので、おれたちのまま気を失つたにちがいない。

与那原——那覇戦線で苦戦 銃弾一発が左手を貫通

兵を殺してきたが、ついに、その報いの時がきた。南部式軽機関銃を手に日本兵がおれからわずか一歩ほど離れた蜘蛛（くも）の巣状の穴の一つから飛び出し、おれを一連発で倒した。銃弾一発がおれの自動小銃の握りの部

認識票を弾き飛ばし、上着の左半分を引きちぎつた。おれの後ろにいた仲間がおれを撃つた日本兵を撃ち殺した。彼は、おれを助け起こすと「退却するぞ。丘の占領は無理だ。君は大丈夫だ。一人で帰れる

おれが意識を取り戻したのは戦線後方の救急病棟の上担架の上だった。小銃の銃剣を地面に突き刺し、点滴を支える台にし、東洋人がおれを見下ろしている。おれの最初の言葉は、君はジャックか、ね。だった。その男は笑って答えた。いいえ、中国人です。彼は三〇七連隊の医療兵だった。

戦線の後方二、三の救急病棟への道程はひどいものだった。おれたちは大量の血液を失い、シヨック状態にあり、しかもモルフインを打たれていた。おれたちが撃たれてからも十四時間にもなろうとしているのに、ひどい扱いだ。午後九時になって、ようやくおれは手術台上に上つた。おれの隣の手術台では、兵士が自分の大腸を胸にどさっと積み重ね、医者が弾丸の通つた大腸の傷口を縫い合わせている。二、三日後、おれは三人の患者と一緒に救急車に乗り、病院船に向かつた。その途中、敵戦闘機が姿を見せ、道路を機銃掃射した。おかげで、運転手は車を藪（やぶ）の中に突っ込んだ。おれの下段にいた患者が文句を言った。おれの血が彼に降りかかっている、と言うのだ。救急車のひどい振動でおれの胸の傷口が開き、おれは大量出血していたのだ。救急車

の連中は、途中で
おれを海兵隊
移動病院に降ろ
した。そこでお
れは点滴を受け
た。海兵隊の処
遇はひどいもの
だった。テント
の端では何と、
ジャップの捕虜
が治療を受け、
温かい料理が出
されている。名
誉の負傷をした
はずのおれはと
きたら、Kレー
ション（配給
食）を投げ渡さ
れ、左手の自由
がきかないから
それを歯で開け
なきゃならない
んだ。おれはい
つも海兵隊は最
低野郎だと思っ
ていたが、実際
その通りだった。
（ドキュメンタ
リー作家）

沖縄戦シヨウダウ

「集団自決」を目撃した米兵士の記録

13

グレン・シアレス
訳注・上原 正稔

最終章 ホーム・スイート・ホーム

翌日、大量の負傷兵が飛行機でクアムに移送された。氏名点呼があり、おれは別の名前と呼ばれた。おれの名前はシアレスと言うのだと何度、説明しても点呼係は「ノー、そんな筈はない」の繰り返しだ。点呼係はおれのバックから認識票を出してきた。確かに、そいつには別の名前が刻まれている。それは数日前、穴の中から逃げそこなって手投げ弾の爆

発で死んだ兵士の認識票だった。おれの認識票は弾丸で弾き飛ばされた、と説明したが、信用してくれない。おれはフリーピン戦線以来、給与をもらっていない。これで、給与は当然、お預けになった。おれがハワイの病院に善くと、A中隊将校が渡嘉敷島でのおれの活躍に対し、ブロンズ・スター勲章を推薦しようと言ってくれた。それっきりだ。おれたちの将校は皆、倒れてしまったので、証明してくれる者はいない。カルフォルニアの陸軍病院に着いた。

入院患者は皆、戦友の姿を捜している。赤字の看護婦がトイレト用品をおれたちに渡している。突然、懐かしい戦友の声がした。「いよお、ジャップが尻を出しているところ

傷していた。A中隊の戦友はほとんどが戦死し、ほんのわずかの生き残りも皆、負傷していた。おれたちは皆、血の海と砲弾の山を渡り歩いたのだ。

おれは重症患者だったが、一カ月も病院にいと、うんざりする。病院を出ることに決めたが、金がない。軍当局の手続きとかいうお決まりの話だが、おれの給与がまだ下りない

連中だった。軍当局とは大違いだ。シアトルの街に入った。昔と何も変わらない。ホーム・スイート・ホーム。とうとうおれは自分の家に戻ってきた。扉を開けると、あのルビーがおれの胸に飛び込んできた。おれは言いたいことは一杯あったのに言葉が出てこない。涙って奴が出てくるだけだ。おれはその時はっきり知った。この世で最も大切なのはルビー、君だ。おれはどんなことがあろうと君を離しはしない。

戦友はほとんど戦死

少ない生き残りも皆負傷

を撃ち殺したヒーローがやってきたぞ」。優しい看護婦さんたちは、当然、シヨックを受け、おれは赤面する。その戦友は高校のクラス・メイトだったが、フリーピン戦線で右目を失った。もう一人のクラス・メイトは手に負

のだ。おれは一銭も持たずに、病院を抜け出した。故郷に帰らねばならない。ルビーに会わねばならない。おれはヒッチハイクで故郷のシアトルに向かった。何台か乗り換えたが、車に乗せてくれた運転手は皆、気持ちのいい

あとがき
これで物語を閉じる。原作者グレン・シアレスさんは自分の孫たちのために戦争の物語を残した。一年半前、おきなわプラスα市民の会のデーブ・ダーベンポートさんを通じて、この原稿と出会った時、

今、グレン・シアレスさんは癌(がん)に侵され、静かに死を迎えている。その傍らには愛妻ルビーさんが付き添っている。彼はこの世で最も大切な人の暖かい手を握り、目で語る。「ルビー、すばらしい人生をありがとう」(おわり)



グレン・シアレス さん(左)と 妻のルビーさん アメリカ・シアトルにて